
OA&W

緑野 山葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

O A & a m p ; W

【Nコード】

N 0 6 3 8 Z

【作者名】

緑野 山葵

【あらすじ】

5年前に戦争を終えた平和な国セルドア王国で、心に傷を抱えた少年の運命が、あるひとつの出会いによって大きく変わっていく。

序章（前書き）

初めて書くので温かい目でご覧ください。

序章

気づけば俺は、手足を縛り付けられ、ベットに横たえられていた。周りには何人かの白衣を着た研究員。そして、見覚えのある顔。

そうだ。思い出した。俺は自らを差し出してでもこの国を救う覚悟でここにいるのだ。

「気分はどうだ？」

俺のよく知るその男はさして心配していなさそうな抑揚のない声で聞いてくる。

「ああ、最高だよ。これで俺は英雄になれるんだからな。」

「では始めろ。」

「はい。」

研究員の一人が注射器に入った？それ”を俺の体へと注入した。．．

そう、僕の兄はこの国に殺されたのだ。

この墓石の前に立つのももう何度目だろうか。

そして、

いくつもの屍を乗りこえて成り立っているこの国で、大事な人の死を乗りこえられずにいる僕も、

例外なく今を平凡に生きている。

そう、この日まで。

第1話「偶然の必然」

5年前、この国セルドア王国は、隣国のクライス皇国との戦争を終えた。

クライス皇国が南下政策の重要拠点とするため、僕の住む国セルドアに宣戦布告してきたのだった。

圧倒的不利と思われたセルドアは、当時開発されたばかりの戦闘技術であるOA&Wを使用する特殊部隊を導入。戦況は一変し、クライス皇国が一足遅れてOA&Wを取り入れた頃には、その領土の三分の二を占領していた。

しかし、首都侵攻を目前にして、時のセルドア王が死亡。指揮系統はめちゃくちゃになり、やむなくセルドアは、占領した領土の半分を自国の領土とすることを条件にクライス皇国と休戦協定を締結した。

たかだか五年前かと思うかもしれないが、当時小学四年だった僕は、少し前まで戦争をしていたなんて実感は全くない。

いや、全くとは言えないか。むしろ、鮮明にただ一つのことだけを覚えている。

僕は今高校一年生だ。少し寄り道をしすぎてしまったか。辺りはもう真っ暗だ。人っ子一人いない。

そんなに何時間も居たのだろうか。携帯を家に忘れたから時間が分からない。急いで帰らなければ、と思い駆け出した。

そのとき。駆け出したと同時に 僕の歩く道路の右側の学習塾の二階の窓が突然割れた。

そこで僕は初めて、？それ”を見た。

まず目に入ったのは、黒い何かだった。

その後にもうひとり、リボルバー式拳銃を二丁構えた男が、その黒い塊を追って出てきた。

「待ちやがれ！」

地面に着地したその長身の男は僕には目もくれず、あろうことか街のど真ん中で銃をバンバン撃ちまくった。

まあ僕しかいないみたいだけど。

何発撃たれたか分からない黒い塊はみるみるスピードを上げて、街中発砲男とかなり距離を取り、逃げ切ったようだ。

その束の間、黒い塊に逃げ切られた拳銃男が行きと同じ速さで戻ってきた。やっぱり銃を撃ちまくりながら。

いや待てよ？撃ってきた？僕を狙って？

だが放たれた弾が撃ち抜いたの僕じゃなかった。撃ち抜かれたのはいつの間にか僕の後を取り囲んだ数人の武装した兵士だった。

「おいお前！こんなとこで何をしている！」

「何って、あなたこそ何をしてるんですか？それにこの人たちは何なんですか？」

倒れている兵士達を指さしてこれまでの疑問を全て投げかける。

あれ？この人達は撃たれたはずなのに血が流れていない。それに死んでいるようにも見えない。

「何ってお前何も聞いてないのか？今は…」

言いかけたところでまた兵士達が現れた。

「とりあえず話は後だ。逃げるぞ！」

「は、はい！」

いつの間にか15人程の兵士に囲まれていた。

前方の兵士を撃ち、道を開けて学習塾の中へ入った。どうやら中までは追ってこないらしい。

塾と見せかけてどうやら軍の施設のようだ。

「あの、これは一体何が起こっているんですか？」

一息ついて、改めて訊く。

「あのなあ。さっきの放送聞いてなかったのか？」

「放送？」

「避難勧告だよ。ホントは機密事項なんだがなあ　まあここまで見られちゃったらはぐらかしてもしゃあねえか。」

「実はクライスのテロリストが潜入してるってんで俺ら軍人に排除命令が出てな、

今ここには俺しか戦える奴がいらないもんだからどうしようか考えてた矢先にここに乗り込まれた。そんで追っかけてったって訳さ」

「そうか、僕の見た光景はちょうどそのテロリストを追いかけたところだったのか。」

「でもなんであなたを狙って来たんですか？そいつらは」

「いんや、狙われたのは俺じゃあないな。お前は奴が逃げる時見なかったか？ちょうどお前くらいの歳の女の子を」

「女の子？」

「そういえば、逃げていく黒い物体がピンク色をした何かを抱えていたような。」

「今思えばあの黒いのも抱えられていたのも人だったのだ。」

「奴らはその女の子が目的だったみたいでな、連れ去られちゃあしやうがないって訳で俺一人で出てったんだよ」

「なら、と僕は同じ質問をする。」

「その子を連れ去る理由は何です？あなたをおびき出す為の人質にでもするつもりで？」

「男は腰に巻きつけたバッグと銃に弾丸を補給しながら、いや、と首を振る。」

「間違いなくあの子、アスカを狙ったんだろうよ　あいつはちょっと特別だからな」

「特別？僕の頭の中である答えが導き出されたような気がした。」

「とにかく、俺はアスカを助けに行く。奴らのアジトの情報は軍部から入っているからな」

「じゃあ僕はどうすれば？」

「一緒に来い。どの道危険だが、ここに一人でいるよりはいくらかマシだ」

「わかりました」

「じゃあ 一気に雑魚を蹴散らす。死にたくなかったら絶対に離れるなよ！」

「はい！」

あ、そうだ。と男が思い出したように言う。

「俺はドレフュスだ。お前は？」

「カズマです」

そして僕達は学習塾を出て、女の子を助けに行くというなんだか漫画の主人公みたいな事をするために、

クライスのテロリストの本拠地へと向かった。

第2話「誘拐犯の正体」

正直、生半可な道のりではなかった。何度死の淵をさまよったことか。三途の川で溺れてなんとか這い上がってきたみたいな感覚だった。

兎にも角にもなんとか敵のアジトである街外れの工場に辿り着いた。アジトなのに敵が誰もいない。

おそらくここに来る途中に、僕の前を歩いているこのドレフュスさんがもう言葉通り雑魚をすべて蹴散らしたからだろう。

それにしてもすごい。この人の射撃の腕前は。

20人程のテロリストをひとりで、それも無傷で倒したのだから。だがやはり誰も殺していない。

急所をうまく外しているんだろうか？しかし撃たれて血が出ないなんてことがあるんだろうか。

「あの……！」

僕が言葉を発したのと同時にドレフュスさんが手で僕が話すのを制した。

「静かに。気づかれるぞ！」

その言葉によって一気に緊張が走る。

学校の体育館の半分くらいであろうこの工場の中央に、人影。

不気味な黒い何かを纏ったその男は確かにさっきあの学習塾を襲った奴だろう。

その傍らには女の子が一人横たわっている。この子がアスカだ。

突然、ドレフュスさんが両手に銃を構え、12発、つまりは一度に撃てる最大量を男に向かって放った。

だが、男をとりまく黒いものがそれを防ぎ、こぼれ落ちる葉莢の音が辺りに響き渡る。

第3話「2つの通り名」

撃たれた男はゆっくりと振り向く。

「やっぱりな」

ドレフュスさんが弾を込めながら、攻撃を防がれたにもかかわらず、不敵な笑みを浮かべ、確信めいた口調で言う。

「お前、「影使い」のセシルだろ。最初に見た時から思っではいたが、ここに来てはつきりしたぜ」

「ははあ ばれちゃったかあ」

セシルと呼ばれたその男は、さして驚く様子もなく、頭を抱える。

「そんなに有名人なんですか？こいつ」

通り名があるくらいだから、よっぽど知られた奴なんだろうと思っ
て訊く。

「まあそうだな、こいつは先の戦争で当時クライス唯一のOA&W
部隊のエースだった男だ」

その言葉に僕は驚愕した。

「エースだなんてそんなあ。今は知っての通りテロリストとして絶
賛活躍中さ。それにあんただってあの戦争では国王直轄のOA&W
部隊10人の内の一人だろ？「無血の遊撃手」ドレフュス大尉さん
♪」

「ドレフュスさんがOA&W使い？本当なんですか？？」

本人が反応するより早く、ドレフュスさんに尋ねる。

「ああ、お前も見たら？俺に撃たれた奴は傷ひとつ付いちゃいなか
ったのを」

やはりそうか。撃たれて無傷なものこれで納得がいく。

第4話「One ability & One weak point」

「じゃあそのアスカって子も？」

すると、セシルがすかさず、

「知らないの？ その子はねえ、弱点がないんだよ！」
と言う。

「弱点がない？」

セシルの言う言葉の意味が全く分からなかった。ありえない。

そう、そんな事がありえるのなら、あんなことにはならなかったのだから。

O A & W。それは、ひとつの能力を得る代わりにひとつの弱点を得る力。

弱点は能力によって違う。

それは時に弱点でありリスクであり障害である。

能力も弱点も力を得ないと分からない。故に選ばれた人間にのみ力の譲渡が認められている。

だから弱点がないはずはない・・・

僕はまだ戸惑っていたが、やがてドレフュスさんがセシルに銃を突きつける。

「やっぱり知ってやがったな。ならやはり生かしちゃおけねえ。

おいカズマ！そこはあぶねえ！どいてろ！」

この2人がO A & W使用である事実と、そのO A & Wの定義を根底から覆す少女の存在に、

僕はそんな言葉も耳に入らずただただ呆然としていた。

「ここで死ぬわけにはいかないんだよね」この子は僕にとっても必要だからね」

そう言うと、セシルは自らの影を鎌の形に変形させ、ドレフュスさ

んへそれを振り下ろす。

ドレフュスさんも応戦するが、やはり弾が影に防がれる。

セシルは今度は無数の紐状に影を変化させ、攻撃する。

これはドレフュスさんが全て撃ち落とす。

そんな攻防を繰り返して、しばらくするとドレフュスさんが僕に言うてきた。

「おい！ぼさつとしてんじゃねえ！何かこの力に思い入れがあるみたいだが、頼みがある！」

「頼み？」

ようやく僕は顔を上げる。

戦いながら、ドレフュスさんはこう続けた。

「そうだ。お前に、OA&W使いになってもらいたい！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0638z/>

OA&W

2011年12月2日15時53分発行